

# 同窓会便り

発行  
 東北大学 電気・通信・  
 電子・情報同窓会  
 仙台市荒巻字青葉  
 TEL 022-222-1800  
 発行責任者  
 緒方研二  
 (題字 緒方研二氏)

## 緒方研二会長の

## 勲二等瑞宝章の受章を祝して

吉田庄司



本同窓会会長の緒方研二博士が、昨年十一月三日に勲二等瑞宝章を受章されました。同窓会の後輩として誠に喜ばしい限りであります。御祝いの言葉を書くようにと同窓会より頼まれましたが、私よりはるかに先輩でもあり、常日頃畏敬してきた博士のことですので、到底その任は果せないかと躊躇しました。

しかし、お世話になった博士に祝意の万分の一でもお伝えできればと思い、拙い筆をとった次第です。

緒方研二博士は、昭和十六年十二月東北帝国大学工学部電気工学科を卒業され、海軍技術士官としてレーダの開発に従事されました。終戦と共に通信院電気試験所に転じられ、以後日本電信電話公社にあって技師長室調査課長、施設局次長、中国電気通信局長、技術局長、研究開発本部長、総務理事等の要職を歴任されました。

公社退職後も昭和五十二年より日本電気株式会社専務取締役、同社副社長、日本電気エンジニアリング株式会社社長等を歴任され、現在も安藤電気株式会社会長として引き続き我が国電気通信の発展に大きく貢献しておられます。

博士は、四〇年の水きにわたり電気通信工学並びに電気通信事業の要職にあつて、広く豊かな識見と高まいた抱合力ある人柄により、新技術の研究実用化、

通信事業の近代化、関連業界や学術の発展、振興、及び後進の育成指導等に尽力され、多大の業績を挙げられました。

まず、研究面では、戦後の混乱期にあって、システムの信頼度設計、音声瞬時値の合成、準漏話雑音の評価および非直線歪相加則の研究を行われ、超多重周波数分割伝送方式設計の基礎を与えられました。この間、「真空管の長寿命化」の研究によって郵政大臣賞を、次いで「非直線歪の相加則」の研究により日本電信電話公社総裁賞を、又、「超多重電話局(四八六通路路)の研究」によって電子通信学会論文賞を受ける等、赫々たる成果を挙げられました。これにより、昭和三十二年「搬送回線の直線及非直線漏話に関する研究」によって東北大学より工学博士の学位を授与されております。

更に、荒廃した電話網を建直すため、「すぐつながる電話」を目標として施設局次長、中国電気通信局長等の立

## 岩崎俊一教授の文化功労者顕彰を祝して

—日本学士院賞に引き続いて—

村上孝一



電気通信研究所所長岩崎俊一教授が、昭和六十二年十一月四日、東北大学卒業後一貫して続けてこられました

磁気記録の研究に対し文化功労者として顕彰されました。同年六月の日本学士院賞受賞に続いての栄誉であり、

先生に心から祝意を表する次第であります。情報を磁気テープや磁気ディスク上に微細な磁石として記録する

磁気記録は、今日の情報化社会に不可欠な技術になっていきます。この分野での最も重要な研究テーマは、単位容積当りに保存できる情報量、すなわち記録密度の向上です。岩崎先生は、通信工学科に在学中に永井健三先生により卒業研究のご指導を受け、通信工学科を卒業後、先生のお勧めで、当時、他の企業に先駆けて磁気録音機の開発を熱心に進めていた東京通信工業株式会社(現在のソニー株式会社)に入社されました。

た。これらが、以後、先生を磁気記録の道に進ませることになり、昭和二十六年、電気通信研究所永井研究室に戻られてから、一貫して磁気記録の高密度化のテーマに取り組み、傑出した成果を挙げられました。

その一つは、高性能金属微粉末テープの発明です。高密度化には磁気テープなどの記録媒体の磁性層を薄くし、残留磁束密度と抗磁力を大きくするのが有効であることを理論的に見いだされ、昭和三十二年、鉄・コバルト・ニッケル合金粉末テープを世界で初めて試作されました。これは、今日八ミリビデオテープやデジタルオーディオテープなどに使われているメタルテープの始まりです。これはまた、いま話題のハイビジョンVTR用のテープにも使われる予定になっていきます。

岩崎先生は、磁気記録の研究を始めた当初から、さらに高密度化を図るためには磁気記録理論を根本的に検討する必要があると考えられ、昭和四十年頃、磁気テープの厚み方向成分も考慮したベクトル磁化過程と媒体内の内部磁界の影響を動的に考慮する新しい磁化の理論を導入されました。これは非線形な磁気記録再生過程を動的に計算機解析する基礎理論として現在広く用いられています。

さらに先生は、磁気記録の原理上での大きな転換である垂直磁化を用いる記録方式を提案され、昭和五十年頃、そのための磁気ヘッドや記録媒体を發明して基本形態を確立されました。これは、情報一ビットを記録媒体上の千分の二〜三平方ミクロン内に書き込める潜在能力のあることが理論的にも実験的にも確認されている超高密度記録方式です。光記録



場で電信電話施設の設計、建設、運用、保全の各部門を指導し、今日「電話社会」ともいわれるような世界的に高度な全国ダイヤル即時網を実現させるなど事業の発展に重要な役割を果たされました。又、電子交換機については、現在導入されているD10形電子交換機の開発を推進して、昭和四十七年毎日工業技術特別賞を授与されました。

一方、日本学術会議会員、電子通信学会会長、テレビジョン学会会長、情報処理学会副会長に選任され、我が国の学術振興に関する全般的な政策策定に尽力されました。又、東北大学、東京工業大学、名古屋大学等の講師として我が国の将来を担う若い人の育成指導にも当られました。

これら一連の業績・活動に対して、昭和五十三年電子通信学会功績賞、昭和六十一年前島賞を授与されております。又、昭和六十一年から本学のため同窓会長として御尽力いただいた

をも凌駕し、現在のVTRの約二千倍に相当する記録分解能があり

このように岩崎先生は、永年のご努力により磁気記録技術を工学として確立され、技術的にも学術的にも世界のトップに引き上げられました。これまで限界に近づきつつあると思われていた磁気記録技術に新たな方向を示され、関連の学界および工業界に大きな活力を与えられました。また同時に、その結果としてもたらされた磁気記録技術の普及が、日本の文化と科学の進展に与えた功績にも計り知れないものがあります。

先生の今後の益々のご活躍とご健康を心からお祈りいたします。

なお、今回の岩崎俊一先生の文化功労者とし



ております。

以上のように、博士が終始一貫、電気通信事業に従事され、永年にわたり培われた豊富な知識と卓越した手腕をいかんなく発揮されて、我が国電気通信産業の発展に寄与された功績は極めて大きく、今回の受章に至ったことと拝察しております。会長の今後益々の御活躍と御健康を祈念し、勲二等瑞宝章の受章のお祝いの言葉とさせていただきます。

最後に余談になりますが、電電公社退職後還暦になって着手された車の運転で、御夫妻で御元気に各地をドライブしていらつしやるのが、今後とも末永く我々後輩を御指導いただきたいと思っております。



ての御顕彰により、先に学士院賞、文化功労者として表彰された西沢潤一前所長と共に、東北大学電気通信研究所は二名の現役教授の文化功労者を擁することになりました。この事は我国で極めてめづらしい事例であり、電気系同窓生にとり誇りとするところであります。今後電気系に属する若い研究者により、将来このような榮譽が継続されることを祈って止みません。

## 西村栄一君を偲んで

松前重義



西村栄一君は、大正十三年に東北帝国大学電

気工学科を卒業した後鉄道省に入り、日本における鉄道の大変革の時代を担当して、見事に我が国の優秀な鉄道技術の指導者としてその近代化に努力を続けられたのである。其の後大分県より推されて衆議院に立候補

## 六角英通先生を偲んで

村上孝一



年末の諸行事で忙しい十二月十九日、六角英通先生の逝去の報に接し、先生の御冥福を祈ると共に、先生の御指導を受けて過した私の青春の日々の想

い出を含めて、時代の歯車の転回を思い、大きな寂しさを感じました。先生は明治三十五年に歴史ある六角家に生を受けられ、昭和二年三月東北帝国大学工学部電気工学科を卒業後、電気試験所を経て、昭和十年四月より昭和三十年三月迄東北大学電気工学科講師及び教授を歴任され、電力発生分配に関する教育と研

したのであるが、当選後において彼の人格と力量が高く評価され各省の大臣を経験し内閣の枢要なる地位を担当するに至ったのである。彼は政治家としては稀にみるほどの技術者として、科学技術界の進歩、発展に対してその前進のために努力を払い、大きな功績を後世に残したのである。彼を失って科学技術界は限りない寂寥を感じざるを得ないのである。

究に専念されました。

私が先生の講座の助手、助教として御指導を頂いたのは五年程でしたが、先生と共にその発案の原稿を中野にあった広大な旧宅にお伺いして早朝より夕方まで最終校正をした事、先生にたびたび御馳走になり、当時めづらしかったワイン、ウイスキーの年代物の講義を受けた事、さては食事のマナーから日常の味噌汁のブレンドの方法に到る迄、貴族の生活の美学をお話し下さった事など、先生の柔和な笑顔と共に私の終生忘れ得ぬ思い出となっております。

八日に先生は「文化功労者」に選ばれ、先生のお喜びはもとより同窓生の私共にとっても大きな誇りになる快挙で心からお祝いを申しあげます。以上で第一部を終了し第二部の懇親会に移りました。来賓としてご招待いたしました福島弘毅・大泉充郎（本学名誉教授）両先生からご祝辞を頂き、喜安善一先生の音頭で乾杯し懇談に入りました。会の途中で宮地杭一（芝浦工大教授）、柴山乾夫（本学名誉教授）、清水洋（本学教授）、内田龍男（同助教授）、川又晃（名古屋大学教授）、村上治（NITT関西総支社長）の各氏から、大学の近況や同窓会の活動、各界での活躍の状況などについてスピーチされ、宴が最高潮になったところで、今回幹事補佐として雑務全般を支援していただ

いた東京電力・日立製作所の若手卒業生の紹介の後、全員で「青葉燃ゆる」を斉唱し、緒方会長のご発声で万歳三唱しお開きとなりました。当日は小雨降る肌寒い日となり出席者は七十名程でしたが、その中でも御招待の先生方が十二名と多数ご出席賜り、遠路、ご多忙のことを拝察し頭の下がる思いに駆られます。東京地区在住の電気系三千名の卒業生を有する会としてははもとより多くの出席者があってもよいのではと痛感いたします。

又、自民党の副総裁として日本の最も重要な政策の実現等に全力を注ぎ、最高の指導者としてその生涯を終わらせたのであった。私は友人として彼のありし日を偲ぶ時、温厚で静かな人柄を思いおこす。しかし寡黙にして雄弁、信賴と情熱に徹した人物であった彼の名は永遠に消えることがないであろう。

先生の御葬儀は二十一日午前、茅ヶ崎の海辺の御自宅で行われましたが、幸いにも暖かい冬の一日でした。先生の柩が御自宅を出、れた時、放たれた真、い十数羽の鳩が二度、三度と天空で円を描きながら飛び去って行ったのを仰ぎ見たときに、先生の御魂も青い青い大空に昇天して行ったような思いが致しました。

先生に御教示を受けた多くの人々を代表して想い出の幾つかを記し、先生の御冥福を祈って止まない次第であります。

最後に御教示を受けた多くの人々を代表して想い出の幾つかを記し、先生の御冥福を祈って止まない次第であります。



### 東海支部

川又 晃

本支部は、名古屋を中心に愛知・岐阜・三重・静岡の四県に在住する約二〇〇名の卒業生で構成されており、その会員数を企業別に見ますと、トヨタ自動車二十五名、日本電装十六名、中部電力十一名等となっております。大学関係では静岡大学十七名、信州大学十名、

豊橋技術科学大学七名、名古屋大学五名、名古屋工業大学三名等となっております。

昭和五十一年に真野国夫先生(当時、名城大学)や池田哲夫教授(名工大)の御努力で東海支部が設立されて以来、毎年六月頃に支部総会を開催しております。昨年も六月二十八日に名古屋市内、第二富士ホテルに於いて開かれました。当日は、設立以来の支部長・真野先生(真野研究開発

技術センター)を中心に、古くは昭和十九年通信卒の本多波雄教授(豊橋技術科学大学学長)から昭和六十年卒の新しい会員まで約四十名が参加致しました。参加者の卒業年度に偏りが見られず、満遍無く出席戴けたこともあり、大変有意義な交歓の場となりました。楽しい談話の一時を過ごしました。なお、この総会は幹事補佐の宗崎久宜氏(通32・中部日本放送)と菅井秀郎氏(子41・名古屋大学)の

世話で開催されました。次年度の支部役員は次のように決まりました。支部長・真野国夫、幹事・川又晃、幹事補佐・菅井秀郎、浦野進(子45・日本電装)、刺余金・基金も乏しく、仙台から来賓の先生方をお迎えすることもままなりません。支部会員相互の親睦をはかるべく、なお一層努力して行く所存です。同窓生の皆様の御支援と御協力をお願い申し上げます。次第です。

## 同窓生便り

### 熊本大学

相田貞蔵

熊本市は九州の森の都と言われ、仙台市にどこか似ているところがある。市の東方には広大な草原をもつ阿蘇山があり、西方はパールのラインの天草五橋を経て遠く有明海を臨む。又、市の周辺にはIC関連、電子情報関係の大小企業があり、熊本テクノポリス財団、大学、産業界が協力して地域社会の活性化や先端技術の育成につとめている。

工学部は改組中で、従来の十二学科、一共通講座が六学科(土木環境、建築、材料開発、機械、電気情報、応用化学)、一共通講座に統合され、改組は本年四月に完了する。同時に博士課程(生産科学専攻、環境科学専攻、システム科学専攻)の設置も完了する予定である。このような改組に伴い、従来の電気工学科、電子工学科、情報

工学科の十二講座編成が五講座(電気エネルギー、計測制御、回路システム、デバイス、通信システム、情報処理システム)の電気情報工学科に統合された。電気情報工学科では教育方針として、工学的基礎に重点を置きながら、急速に発展している先端技術に柔軟に対応できるだけでなく、自ら新しい分野を開拓し、発展させ得る能力を養成することを目標にしている。当学科に在席の学部学生数は各学年百二十〜百五十名、又大学院学生数は博士修士両コースを合せると七十名である。熊本は日本の西南に位置し、諸外国に近いので留学生も比較的多い。

電気情報工学科には五名の東北大出身者がいる。計測制御講座は三つの研究室に分かれ、「電子計測」では小生(教授、電気24)が光、音音関連研究を、「音

熊本大学には法・文・理・医・薬・工・教育の七学部がある。その中で工学部の歴史はかなり古い。明治三十年に第五高等学校に「工

究から開発設計、製造、営業技術にいたる各分野の重要なポストを担当して腕を振っています。また、松下電器グループは国内のみならず世界各国に広がっています。同窓生は松下電器産業本社地区(大阪)、約三十名は松下電子工業(京都)、約九十名は松下通信工業(横浜)でそれぞれ活躍しています。

昨年是我々の大先輩である城阪俊吉副社長(通19)が勇退されましたが、引き続き常任顧問として後輩の指導に当られると同時に、二十一世紀の技術を考

える研究会を主宰され元気に活躍されています。また、松下電器における東北大学卒業生の先達として道を拓かれた定期入社第一回生である阿部秀美(通27)、若木正男(通27)、木村英俊(通27)、森沢一司(通27)の諸先輩が定年を迎えられ、松下電器を既に卒業、或いは近く卒業になられます。

### 東京電機大学

荒谷 孝夫

### 松下電器産業株

佐々木 玲一

我が国は、先進諸国からの技術導入に始まり、その後の研究・開発によって工業化社会として現在の発展を見ているに似ていました。松下電器も家庭用の電気製品を世に送り出して家庭生活の向上に貢献することにより、工業社会の一員として国の発展と共に順調に成長し、今年で創業七十周年を迎えることができました。

昨年はまた、青葉工業会の総会が関西で開催されました。当日はよんどころない用事のために小生出席できませんでしたが、西沢潤一教授の「これからの

当大学を御存知の方も多いためですが、この機会をお借りして大学の紹介をさせていただきます。その起源は古

く、明治四十年に東大を出てまもない新進気鋭の二人の技術者、扇本、広田両氏によって神田の地に夜間の私立電機学校として設立されました。当時は工業が隆盛するさざしにあたり、その将来性を洞察し、既設の国立の大学、高等工業の高等教育だけでは不十分との観点にたち、電気、機械の普通教育を志して発足したわけでした。以後、昼間部も設置される一方、昭和十四年には高等工業が設置され、二十四年にいまの東京電機大学が誕生し、更に三十三年にはわが国初の夜間の大学院が、そして五十二年には埼玉県鳩山の地に理工学部を増設するに至り、理工系の全分野を擁するユニバーシティとして発

現在、我が国は「世

界の中の日本」として、世界各国から国自身が果たすべき新しい役割を求められ、二十一世紀に向けて新しい社会の建設に取り組んでいます。松下電器も社会の変化に適合した新しい体質を求められており、技術部門の改革、流通・販売部門の改革など全社を挙げてこれに積極的に取り組んでいます。

松下電器グループで働く東北大学の電気系同窓生(約二六〇名)は、技術関連部門において先端エレクトロニクス・情報システム・通信ネットワークの研

究から開発設計、製造、営業技術にいたる各分野の重要なポストを担当して腕を振っています。また、松下電器グループは国内のみならず世界各国に広がっています。同窓生は松下電器産業本社地区(大阪)、約三十名は松下電子工業(京都)、約九十名は松下通信工業(横浜)でそれぞれ活躍しています。

昨年はまた、青葉工業会の総会が関西で開催されました。当日はよんどころない用事のために小生出席できませんでしたが、西沢潤一教授の「これからの

各事業場まわり持ちで幹事をつとめ原則として一年に一回親睦会(パーティーのみ)を開いて交流を図っております。電気系卒業生だけの集りは特にありません。この東京電機大学の同窓生は八二五名(六六二年二月)でこのうち約四割を占めております。当社は昨年四月から将来ビジネスの中心に「工作職(高度情報社会)に対応したシステム事業展開」を据え、たので今後ますます電気系卒業生の活躍の場が増すと思われれます。電気系の当社の現役役員古参は永井淳氏(電26)で現在常務取締役、総合研究所長をしております。永井所長は常日頃から次のように述べられております。「従来のように外国からの技術導入に依存するのではなく、自ら将来シーズを創出して行かなければならない。これにつれ研究所の果すべき役割はますます重くなり、応用研究から目的基礎研究の比重をふやしていかねばならず、それには研究者の資質の良さがキメ手となることは言うまでもないが、この質についても「広く浅く」ではなく、「多少狭くてもよいから深く」、また



# 電気・情報系の近況

## 電気・情報系運営委員会

「問題解決型の優等生」でなく、「問題発見型の個性派」の出現を心から期待している。これからもおわかりいただけると思いますが、当社は「研究第一主義」の東北大学の質の高い学生さんにとっては働き甲斐のある職場であると思っております。

冒頭に述べました「東芝パッシング」については皆様から心配いだだいておりましたが、当社ではグループを挙げて国際企業として恥しくないビジネスを展開するための対策を講じつつあり、また今までもっとりしすぎていた社風が今回の危機との遭遇でいささかピリッと締まり、「災転じて福となす」ことを期しておられますのでどうぞ安心下さい。折しも新春の社会人ラグビーで、「東芝府中」が下馬評の劣勢をはねのけて見事優勝したことは年頭に当たっての明るい話題です。

最近の東京の地価の高騰ぶりは気違いじみており、東京遷都論も結構真面目にとりあげられるようになりまして、年末の新聞により「仙台北都論」も有力である？ということですので、実現の暁には当社の総合研究所も仙台に移すのでしょうか。

会員の皆様には益々御健勝にて御活躍のことと拝察申し上げます。さて、この一年の便りとしてはまず、松尾正之先生が停年退官されたことをあげたいと思います。先生は本学において研究教育に多大の御業績をあげられました。御退官後は東京電機大学で御活躍中でございます。穴山武教授は昨年三月で工学部長を退任されました。任期二年の間大変御苦労様でした。代って村上孝一教授は工学部選出の評議員として大学の運営に参画されておられます。今年度大きく変わった

こととしては、御存知のように国立大学の入学試験制度があります。全国が二グループに別けられ、主要大学が東と西に二分されたために、関西など西の地域からの合格者が大変多くなりました。また、今回からは工学部一本で入学しましたから、系・学科の決定がこれからの問題で、色々苦勞しております。

前回の便りで御報告いたしました情報工学科の創設に伴う学科実験研究棟の新築工事がようやく完了しました。これによって情報系の研究・教育態勢が一層充実したことになるこ

とを期待したいと思っております。

次に、電気・情報系教官人事の移動についてお知らせいたします。昨年二月に、通信工学科に通研の宮城光信助教授が、三月には石曾根孝之助教授が、今年二月には中村徳良助教授がそれぞれ教授に昇進されました。ただし、石曾根教授は現在東洋大学の方に移って頑張っておられます。情報工学科では、昨年十二月に越後宏助教授が教授に昇進されるとともに、今年二月には新たに本会員でもある医学部の山本光輝助教授が情報工学科の新設に伴

って増設された生体情報工学講座の初代の教授として迎えられるました。助教授としては、電気工学科で新たに佐藤光男助手、沢谷邦男助手、楠引淳一助手、一ノ倉理助手が昇進、電子工学科で大嶋重利講師が助教授に昇進されました。

最後に、二月一日現在の電気・情報系の専任の教授・助教授の氏名を以下記して近況報告に代えたいと思っております。会員の皆様の御健康と一層の御活躍を心よりお祈りいたします。

**電気工学科**  
 (教授) 安達三郎(主任)、村上孝一、竹田宏、中鉢憲賢、豊田淳一、穴山武(基礎工学教室 一般電気工学)  
 (助教授) 千葉二郎、後藤幸弘、大沼俊朗、新妻弘明、松本英敏、

鈴木光政(基礎工学教室 一般電気)、佐藤光男、沢谷邦男、楠引淳一、一ノ倉理  
**通信工学科**  
 (教授) 清水洋(主任、運営委員長)  
 齊藤伸自、高木 相、宮城光信、中村徳良、(助教授) 齊藤恒雄、西関隆夫  
**電子工学科**  
 (教授) 樋口龍雄(主任)、脇山徳雄、佐藤徳芳、大見忠弘  
 (助教授) 針生 尚、江刺正喜、亀山充隆、内田龍男、島山力三、高橋 研、柴田 直、大嶋重利  
**情報工学科**  
 (教授) 伊藤貴康(主任)、重井芳治、木村正行、丸岡 章、越後 宏、山本光輝  
 (助教授) 中村維男、松山隆司、阿曾弘具、(安達記)

# 電気通信研究所の近況

## 通研広報委員会

会員の皆様にはますます御元気で御活躍のことと存じます。電気通信研究所一館北側に昭和六十一年三月に完成致しました超微細電子回路実験施設加工開発部のスーパークリーンルーム棟は、設備導入を終了して、六十二年四月二十三日にめでたく落成式の運びとなりました。落成式には、学長はじめ学

内関係者および文部省など関係方面の方々二四一名の参列を得、世界最高性能のスーパークリーンルーム施設の完成を祝いました。本施設は、電気通信研究所、工学部電気情報系四学科を中心とする研究室に開放されており、通研・電気情報系における研究の一層の発展が期待されます。現在通研は、岩崎俊

一所长を始めとして、教職員一〇一名、受託研究員一九名、内地研修員六名、研究生九名、それに学部学生七二名、大学院学生二二五名、外国人留学生二二名を含む二名という大所帯となっております。

六十二年度は、岩崎俊一所长が日本学士院賞に続いて文化功労者の顕彰を受けられました。また、西澤潤一教授がNHK放送文化賞と第四六回注目発明賞を受賞されました。

ところで、人事異動では、六十二年三月、長い間電波及び光波伝送の研究を推進してこられた電波伝送部門の西田茂穂教授が停年退官され、後任には米山務教授が超音波通信工学部門から移られました。二月には宮城光信助教授が工学部通信工学科教授に、十二月には中村慶久助教授が教授に昇任されました。さらに二月には、香野俊一助手が助教授に昇任、鈴木隆之助手が仙台電波工業高等専門学

以上、人事異動の結果現在の専任教授および助教授は次の通りです。音響通信(教授、曾根敏夫、助教授、香野俊一)、電気通信方式(教授、野口正一、助教授、白鳥則郎)、固体電子工学(教授、宮本信雄)、電波伝送(教授、米山務)、超高速波(教授、小野昭一、助教授、横尾邦義)、通信用電子物理(教授、武内義尚、助教授、今井捷三)、電気通信材料学(教授、荒井賢一)、情報理論(教授、佐藤雅彦)、光波通信工学(教授、川上彰二郎、助教授、皆方誠)、記録工学(教授、中村慶久)、光電変換工学(教授、湖田資勝)、超音波通信工学(教授、岩崎俊一)、真空電子装置(教授、水野皓司)、固体振動回路工学(教授、山

之内和彦、助教授、竹内正男)、超真空電子工学(助教授、蝦名淳子)、制御工学(助教授、大矢銀一郎)、電子音響学(教授、御子榮宣夫、助教授、坪内和夫、森田清三)、量子電子工学(教授、稲場文男、助教授、伊藤弘昌)、プラズマ電子工学(教授、澤田康次、助教授、宮野健次郎)、分子電子工学(教授、西澤潤一、助教授、須藤建)、附属工場(工場長、水野皓司教授)、超微細電子回路実験施設(施設長、御子榮宣夫教授、結晶育成部主任、稲場文男教授、測定解析部主任、宮本信雄教授、加工開発部主任、御子榮宣夫教授、加工開発部助教授、室田淳一(一月五日現在))

同窓生の皆様の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。(宮野記)

展してきました。現在は神田に工学部一部、二部(夜間)、短大(夜間)、および大学院があり、鳩山に理工学部、大学院があり、小石川に高等学校と電機学校(夜間)があります。大学からは毎年約二千人が卒業し、大学OBは約四万人、学園全体の同窓生は約十二万人を数え、各方面で活躍しております。学風は実学尊重という創立時の理念を受継ぎ、多少地味ですが堅実な道を歩んでおります。

当大学の東北大学電気系同窓生は五人で、すべて第二あるいは第三の人生を過ごされており、全員元気に教鞭をとっております。神田には電気通信工学科に三浦種敏先生(電18)と私(通28旧)の二人がお

ります。三浦先生はN T T通研、日立を経て来られ、現在学科長として多忙な日を送られ、私はN T T通研から移り、現在電子計算機センター長として神田と鳩山の情報処理設備の充実、運用を担当しております。一方、鳩山には自然科学系列に最近東北大学から移られた桂重俊先生(通19)と、応用電子工学科にN H K技研、松下技研から移られた中野朝安先生(通21)、そして昨年、東北大学から移られた松尾正之先生(通21)がおられ教育に研究に張切っておられます。

私大はいま文部省助成が年々削減され、また六十七年をピークに急減する十八才人口の問題などで厳しい冬の時代を迎えようとしております。この苦しいサバイバル競争に残る対策の一つとして狭い神田だけでは発展が望めないことから最近千葉方面に工学部が進出する計画が決まりました。今年はその準備で多忙な年になりそうです。今後の社会の高度化、多様化に対応し、教育研究の一層の充実を願っておりますのでよろしくお願い致します。

増設された生体情報工学講座の初代の教授として迎えられるました。助教授としては、電気工学科で新たに佐藤光男助手、沢谷邦男助手、楠引淳一助手、一ノ倉理助手が昇進、電子工学科で大嶋重利講師が助教授に昇進されました。

以上、人事異動の結果現在の専任教授および助教授は次の通りです。音響通信(教授、曾根敏夫、助教授、香野俊一)、電気通信方式(教授、野口正一、助教授、白鳥則郎)、固体電子工学(教授、宮本信雄)、電波伝送(教授、米山務)、超高速波(教授、小野昭一、助教授、横尾邦義)、通信用電子物理(教授、武内義尚、助教授、今井捷三)、電気通信材料学(教授、荒井賢一)、情報理論(教授、佐藤雅彦)、光波通信工学(教授、川上彰二郎、助教授、皆方誠)、記録工学(教授、中村慶久)、光電変換工学(教授、湖田資勝)、超音波通信工学(教授、岩崎俊一)、真空電子装置(教授、水野皓司)、固体振動回路工学(教授、山

之内和彦、助教授、竹内正男)、超真空電子工学(助教授、蝦名淳子)、制御工学(助教授、大矢銀一郎)、電子音響学(教授、御子榮宣夫、助教授、坪内和夫、森田清三)、量子電子工学(教授、稲場文男、助教授、伊藤弘昌)、プラズマ電子工学(教授、澤田康次、助教授、宮野健次郎)、分子電子工学(教授、西澤潤一、助教授、須藤建)、附属工場(工場長、水野皓司教授)、超微細電子回路実験施設(施設長、御子榮宣夫教授、結晶育成部主任、稲場文男教授、測定解析部主任、宮本信雄教授、加工開発部主任、御子榮宣夫教授、加工開発部助教授、室田淳一(一月五日現在))

